
龍魂 黒炎の龍と獄炎の獅子

sibugaki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍魂 黒炎の龍と獄炎の獅子

【Nコード】

N4994U

【作者名】

sibugaki

【あらすじ】

リリカル銀魂Strikers 蒼炎の龍の前の話
修羅として生きることを決めたスバルが修羅世界でいかなる試練を越えて来たのか？そして、何故トウマが狂気に落ちてしまったのかそれを此処で話しておくことにする

注意：此処ではかなりグロイシーンやダークなシーンが多いです
苦手な人はご注意ください

すべての始まり（前書き）

スバルが何故修羅となったのか
何故トウマは狂気に落ちたのか
それを話すためにはまず事の始まりを話さねばならない

すべての始まり

全ての始まりは4年前であった。

新暦0071年4月29日

ミッドチルダ臨海第8空港

その日は何時も以上に人が込み合っていた。
大勢の人、人、人……である。

皆それぞれの目的地を目指して忙しく歩き回っている。
そんな中、一人の少女が駆け回っていた。

「うーん、此处じゃないみたい？ 一体何処行っただろう？」

少女は一人そう呟きながら空港内を歩き回っていた。
青い髪に緑の瞳をした11歳位の少女である。

「きっと近くに居るよね。 よおし！ 頑張って探すぞお！」

少女は手を高く振り上げて再び空港内を歩き回った。
だが、この時まだ少女は知らなかった。

自分自身に起こり得るであろう激動の人生を……

時刻は夕方過ぎ、その時にそれは起こった。

ミッドチルダ空港の大火災。

大勢の人々が取り残された中、管理局の魔道士達も懸命に救助活動を行っていた。

しかし火の勢いは止まらず消火は困難を極めていた。

「駄目だ！一旦引き上げよう！」

「まだ子供が中に居るんだぞ！」

消防隊が声を張り上げあう。

そんな大火災の中で、彼は居た。

「頼む！命だけは助けてくれ！」

「裏切り者の末路は貴様も知っていよう・・・覚悟！」

赤い髪をした少年は片手に覇気を纏いその裏切り者を処刑した。
残っていたのは裏切り者の残骸のみである。

処刑を終えた少年は覇気を抑えた。

そしてフツと息を吐く。

「これで使命は終わった・・・後は此处を離れるだけ・・・ん？」

人知れず離れようとした時であった。

少年の耳に微かな声が聞こえた。

それは少女の泣き声でもあった。

炎の燃え上がる音の中に微かだがそれは聞こえてきたのだ。

「まさか・・・こんな炎の中にか？」

少年は驚いた。

こんな炎の中生身の人間ではすぐに黒焦げになってしまう。

「・・・間に合うか？」

少年は舌打ち混じりに言い放った。

そして声のした場所へ向かう。

其処は広々とした空間であった。

其処には一人の少女が蹲り泣いていた。

靴は片方が脱げ落ちてしまったのか履いて居ない。

両手で顔についた煤を払いながらも滝の様に涙が溢れている。

そんな時であった。

少女の背後にあった石像が倒れてきたのだ。

少女はそれを見て動けなかった。

もう助からない。

もう家族にも会えない。

そんな思いが彼女の中を駆け巡っていたのだ。

だが、その時であった。

「空円脚！」

少年の掛け声と共に石像は粉々にされた。

粉末状になった石像の破片の中少年は少女の前に降り立つ。

「大丈夫か？」

振り返り、少年は少女を見た。

少女は涙目になりながらもその少年に縋りつく。
相当怖い思いをしてきたのだ。

そんな少女を少年は優しく頭を撫でていた。

「お・・・お兄さん・・・誰？」

ようやく落ち着きを取り戻した少女が少年に尋ねる。

「俺は・・・」

少年がそれに答えようとしたその時であった。
突如として近くの壁が崩壊したのだ。

嫌、吹き飛ばされたと言った方が正しい。

そして破壊された壁の向こうには一人の少年が立っていた。

少女を助けた少年とは打って変わってこちらは青い髪をした鋭い目
つきの少年である。

「フォルカ！一体どうしたん・・・ん？」

少年が事情を聞こうとした時、目の前で少年に縋りつく少女を見た。
明らかに自分達とは違う服装をした幼い少女である。

それを見た少年は更に鋭い目つきになって少年を睨む。

「フォルカ・・・貴様」

「フェルナンド！待ってくれ！」

フォルカと呼ばれた少年がフェルナンドと呼ぶ少年を止めに入る。

「退け！貴様修羅の掟を忘れたのか？」

「忘れるものか！『我等修羅が無名の内にはいかなる理由であろうと外界への接触を禁ずる。もし外界の人間に見られた場合はその場で抹殺せよ』その掟は覚えている」

「そうだ！そしてその娘は俺達を見た・・・殺すしかない」

フェルナンドはそう言つて両の拳に力を込める。

拳から蒼い炎の様な気が溢れ出ているのが見える。

触れるだけで人を殺せそうな気が流れているのだ。

それを少女に向けて放とうとしている。

だが、それをフォルカが前に立ち遮る。

「何のつもりだ？退け！フォルカ！」

「退くつもりはない。この子はまだ子供だ！その子を殺す事は俺には出来ない！」

「修羅に女も子供もない！貴様が退かないのなら貴様ごと・・・」

フェルナンドが狙いを少女からフォルカに変える。

フォルカはそれに対し何もせず立っていた。

覚悟を決めたのだろう。

だが、そんなフォルカの前に少女が立つ。

「何の真似だ？」

「もう止めて！このお兄ちゃんを虐めないで！」

「き、君は・・・」

その行いにフェルナンドは勿論フォルカすら驚いた。

しかしフェルナンドは未だ変わらず険しい目線で少女を睨む。

「貴様・・・分かってるのか？俺はお前を殺すのだぞ？俺が恐ろしくないのか？」

「こ・・・怖いよ・・・でも、でもこのお兄ちゃんは私を助けてくれた！だから、だからこのお兄ちゃんを虐めないで！」

目を潤ませながらも必死に答える。

恐怖で胸が張り裂けそうなのだろう。

それでも必死に堪えてフォルカを助けようとしているのだ。

そんな少女の回りからはフォルカやフェルナンドと同じ物を感じ取れた。

まだ未熟だがそれは間違いなく『覇気』であった。

「こいつ・・・異世界の住人だと言うのにこれ程の覇気を・・・」

その覇気を見て二人が驚いていたその時であった。

「フォルカ！フェルナンド！一体どうしたと言うのだ？」

『アルティス兄さん！』

二人が視線を向けた其処には銀色の髪をした青年が立っていた。

長いマントを羽織っていると言うのにそのマントは炎に触れても燃える気配すら見せない。

それは彼の覇気が衣服を守っているからだ。

そして、そのアルティスと呼ばれた青年もまたスバルを見る。

そして二人を睨む。

「お前等、これは一体どういう事だ？」

「俺はこのガキを始末しようとしたんだ！だがそれをフォルカが遮

るんだ！」

「彼女はまだ幼いのです！それを俺達の勝手に殺す事などできません！」

フォルカはキツと鋭い目で進言する。

だが、アルティスの目は険しくフォルカを睨みつける。

「言い分は分かる。だが、此处で助けたとしても、いずれ修羅の刺客が現れ、その時には彼女のみならず、その家族や親族、友人に至るまで皆殺しになるのだぞ！どの道・・・お前はその子の未来を潰したのだ」

「う・・・」

反論の言葉が見つからなかった。

正にその通りなのだ。

あの時自分が彼女と出会ってなければ彼女は死ぬ事は無かったであろう。

フォルカは苦い顔をした。

だが、そんなアルティスの前にも少女は立つ。

まるで反論が出来ないフォルカを庇うかのように。

その時の彼女から放たれる未熟な覇気をアルティスも感じ取っていた。

「この娘・・・異世界の人間だと言うのにこれ程までの覇気を・・・」

アルティスもまた少女の覇気を感じ取り驚いた。

アルティスはゆっくりと少女の前に肩膝をつき目線を合わせた。

「娘よ、名は何と言う？」

「私は、スバル・・・スバル・ナカジマって言います」

少女、スバルは自身の名を言った。

それを聞いたアルティスは立ち上がる。

「スバルよ、今からお前に二つの選択肢を与える。一つはこのまま救助されるのを待ち、それ以降修羅の刺客に命を狙われる日々を送る事・・・そしてもう一つは、我等と同じ『修羅』になる事だ」
『な！』

アルティスの示した道にフォルカとフェルナンドは驚いた。

「に、兄さん！それは本当なのですか？」

「こんな子供に修羅などなれるはずがない！」

「貴様等とてかつてはそうであっただろう。それに、それを選ぶのは我等ではなく、スバルだ」

そう言つて二人を黙らせアルティスはスバルを見る。

スバルは只黙つて俯いていた。

「時間は余り無い。手早くして貰いたい」

これ以上時間が掛かれば他の人間に見つかってしまう。

そうなれば今度こそ殺さねばならない。

余り猶予は無かった。

そんな時、スバルは決心した顔でアルティスを見上げた。

その答えは・・・

「私は・・・なります！お兄ちゃんと同じ、修羅になります！」

決意した目でそう告げた。

それを聞いたアルティスは納得したのか深く頷く。

「ならば、スバルよ。お前の中からこの世界の記憶を消させて貰う」

「え？ど、どうして？どうしてそんな事をするの？」

「修羅の世界に置いて過去の記憶は足枷にしなければならない。あればお前の命を奪う危険性がある。故の処置なのだ」

そう言つてアルティスが両手に覇気を込めてゆつくりとスバルの頭に近づける。

「待つてくれ兄さん！その役目は俺がやる」

「フォルカ・・・分かった」

アルティスは下がり、変わりにフォルカがスバルの前に立つ。

「お・・・兄ちゃん」

「スバル、お前の人生を奪つたのは俺だ・・・恨むのなら恨め！殺したいのなら俺を殺すが良い。それが・・・お前の選んだ道なら俺は喜んでこの命を捧げよう。だが、今は・・・コレだけは言わせてくれ・・・すまん」

一言謝罪し、そしてスバルの中に自身の覇気を送り込んだ。

その直後激しいスパークがスバルの脳内を駆け巡った。

その衝撃にスバルの意識は飛び、そのまま倒れそうになる。

それをフォルカがそつと抱き上げる。

眠ったかの様にスバルは動かないでいた。

「これで良い・・・さあ、我等も此処を離れるぞ。これ以上居てはこの世界の住人に見つかつてしまう」

「ああ、行くぞフォルカ！」
「・・・ああ」

三人はそう言い会って霧の如く其処から姿を消した。
火災のあった現場には只一つ、スバルの履いていたであろう靴の片
方だけが無造作に転げ落ちていただけであった。

すべての始まり（後書き）

いやあ、今回はかなりダークな話になっちゃいますねえ

銀時

「俺って出るの？」

多分出ない。此処では修羅がメインだから

銀時

「ひでえ・・・」

主要人物紹介（前書き）

簡単に紹介しておきます

主要人物紹介

キャラクター紹介

() 内の年齢は『蒼炎の龍』時の年齢です

スバル・ナカジマ 11歳(15歳)

ミッドチルダ出身の少女。

空港の大火災の際にフォルカに命を救われたが同時にその為にミッドで生きる事が出来なくなり修羅となった。

その際にミッドに居た記憶の殆どを奪われ白紙の状態で修羅世界に訪れた。

以前の優しく涙もろい性格から一変して殺意と狂気に満ちた性格になっている。

それでもかつての優しさの片鱗は残してあるらしく時として命を奪う事に躊躇いを感じる。

だが、その優しさは彼女に数多くの試練を与える結果となる。

今回の話では彼女が修羅世界で送ってきた4年間について書き記すつもりである。

トウマ・アズマ 12歳(16歳)

スバルと同門の修羅。

この時のトウマはまだ狂気に支配されておらず何処か人を食ったような優しさを持った修羅であつた。

スバルに対し彼だけは優しく接し共に切磋琢磨し腕を磨きあつた。彼が居なければ今のスバルは居なかつた筈である。

そのトウマが何故狂気に落ちたのか・・・それは後に語る事にする。

スバルとトウマの・・・悲しき物語を・・・

フォルカ・アルバーグ 15歳（19歳）

修羅世界の修羅。

修羅将軍になれる力を持つてはいるがそのやさしさ、甘さ故に将軍になれずに居る。

修羅世界の流派『機神拳』の使い手でありその腕前は『超級』の強さを持つ。

礼儀正しく文武を重んじる。

しかし敵に対しては容赦せず例え格下であつたとしても挑んで来た場合は全力で叩き潰す。

スバルを修羅世界に誘つてしまった事に罪悪感を感じており彼女を守ろうと影から見守っている。

そして、もし彼女が望むのならこの命を差し出す覚悟もフォルカにはある。

スバルにとっては肉親の居ない世界で唯一の肉親に近い存在でもある。

スバルの命の恩人でもあり、また恩師に当たる人物でもあるのだ。

主要人物紹介（後書き）

次回から修羅世界での試練が始まります

修羅世界（前書き）

修羅の世界は弱肉強食が掟

弱者は食われ、強者が食らう

そんな世界でスバルは生きていくことになる

これはその最初のお話

修羅世界

スバルが目を覚ましたとき、其処は果てしない森が広がっている丘の上であつた。

目を擦りながら起き上がる。

回りには同じように集められた同じ年の子供達が集まっている。

何故皆この様な場所へ集められたのだろうか。

スバルは思い出そうとした。

だが・・・

「あれ？思い出せない・・・何で？」

幾ら思い出そうとしてもスバルの中はまるで空っぽであるかの様に何も無いのだ。

彼女の中の記憶が一切ない。

そっぴえっているのだ。

「何で？どうして？・・・此処は何処なの？私は・・・誰なの？」

辺りを見回しながらスバルは呟いた。

何故此処に来たかどころか、自身の名前すら思い出せないのだ。

徐々に不安になっていく。

スバルの瞳からうつすらと涙が溢れ出ていた。

回りを見回すと皆同じであつた。

不安と孤独感から涙を流す者も数名は居る。

しかし泣く者が殆どではない。

中にはキツとした表情で前を見据えている者も居る。

すると、其処に数人の青年がやってきた。

「ほう、今度の若人は中々の顔ぶれだなあ」

「はい、中には異世界から来た者も居ます。修羅王」

銀色の長い髪をした青年。アルティスの横に立つ黒い鎧を着た中年の男が目を大きく見開いて子供達を見た。
そして、その視線がスバルに止まる。

「ひっ！」

修羅王の突き刺すような目線を見てしまい怯え出すスバル。

そんなスバルの顔をグッと引き寄せる修羅王。

そしてマジマジとスバルの顔を観察した。

「フツ、良い面構えだ。それに中々の覇気を持っている。生きてこれたときが楽しみだ」

そう言つて乱暴にスバルを離す。

スバルは混乱していた。

覇気？生き残る？一体何を言っているのかさっぱりであった。

すると、修羅王を筆頭に男達は数歩下がる。

此処は断崖絶壁であり、下には深い森が広がっている。

落ちれば最悪命はない。

そんな中、修羅王は子供達に宣言した。

「今より1年の時、うぬらはこの森で生きながらえろ！もし生き残れたら、その者を修羅と認め、名前を授ける！うぬらに修羅の道しるべがあらんことを！」

そう言つて拳を天に掲げると、それを一気に地面に叩きつけた。
すると、叩きつけた拳を中心に横一文字に亀裂が走り、スバル他子

供達の居た断崖絶壁はそのまま森に向かってまっさかさまに落ちていったのだ。

「きゃあああああああああああああああ！！！」

スバルは大声で叫んだ。

他の子供達も悲鳴を上げる。

だが、泣こうが喚こうが助けが来る筈などない。

それが修羅の世界なのだ。

やがて、スバル達の姿は深い森の中に消えていった。

それを見届けた修羅王は満足気な顔をして腕を組んでいた。

「フフツ、次の年が楽しみだな・・・帰るぞ」

修羅王が踵を返す。

それを見て他の修羅達も同様に帰って行く。

只一人、其処に佇んでいる青年が居た。

フォルカである。

「心配か？フォルカ」

「アルティス兄さん・・・」

アルティスがそつとフォルカの肩に触れる。

それを感じたフォルカがそつと振り返った。

そして頷く。

「俺は・・・スバルに地獄の道へ誘ってしまったのかもしれない」

「今更何を言う。全てはスバルの選んだ道なのだ。それに、あそこで選ばなければ、我等はスバルを殺す事になったのだ。今はそう割り切るしかあるまい」

「兄さん・・・スバルを・・・スバルを助ける事は出来ないの
でしょうか？」

フォルカがアルティスに進言した。

だが、その進言をアルティスは却下した。

「それは駄目だ。これはいわば修羅の試練の様な物。これを一人で
乗り切れない者に修羅となる資格はない。もしこの場で死ぬよう
ならいつそ今殺してやった方が親切と言う物なのだ」

「・・・」

「辛いかわフォルカ？だが、これもまたお前に課せられた試練なのだ。
見事それを取り切って見せろ」

「・・・はい」

アルティスの言葉にフォルカは静かに頷いた。
そして踵を返していく。

（スバル・・・無事で・・・無事でいてくれ）

フォルカは去りながら内心そう願うのであった。

「うう・・・いたた・・・」

目を覚ますと其処は一面森であった。
まるでジャングルである。

そんな森の中スバルは起き上がった。
体を見るが特に外傷はない。

どうやら木々がクッションの役割を果たしてくれたのだろう。
ホツとするスバル。

だが、その隣では、一人の少年が瓦礫の下敷きになって動けないでいた。

「うう・・・痛い・・・痛いよぉ！」

涙を滲ませながら少年が泣く。
それを見たスバルが近づく。

「だ、大丈夫？」

「痛いよ・・・助けてよ・・・動けないよぉ！」

涙を流してスバルに助けを求める。

スバルは少年の足を挟んでいた瓦礫を必死にどかそうと試みる。

だが、所詮子供の力では瓦礫を動かす事など出来ず無駄な時間が過ぎていくだけであった。

そんな時であった。

こちらに何かが迫ってくるのを感じた。

一つ、嫌違う！複数が迫ってきている。

それも人間の足音じゃない。

獣の足音なのだ。

それが一斉にこちらに迫ってきているのだ。

「こ・・・こっちに来る」

「早く、早く助けてくれ！」

少年が更に泣き喚く。

スバルは少年の手を掴んで必死に引っ張った。

だが、それでも少年の体はビクともしない。

全く無駄なのだ。

その間にもドンドン足音は近づいてきている。

スバルの中で徐々に恐怖が芽生えてきていた。

このままこの少年と共に居ては自分も殺される。

近づいているのは正しく自分達に『死』を告げる遣い達なのだ。

このまま此処に居てはこの少年と共に殺される。

出来れば助きたい。

だが、今のスバルでは少年を助ける事が出来ない。

どうする？ どうすれば良い？

苦しい葛藤を迫られるスバル。

そして、彼女の選んだ道・・・それは。

「大丈夫！絶対、絶対に守って見せるから！」

手近にあった太い木の枝を手に取り死の遣いと戦う決心をするスバル。

だが、手元が震えているのが分かる。

怖いのだ。

幼いスバルの体から奮えが取れることはない。

そして、そんなスバルの目の前に死の遣いはやってきた。

数は4体。

白亜紀の時代に居たであろう恐竜『ヴェロキラプトル』を連想させる姿であった。

だが、その両腕の鉤爪は更に大きく鋭い。

まるで獲物を切り裂いて食するのに適した感じである。

それが一斉にスバルと少年を睨んでいたのだ。
獣達の目線がスバルを捕らえる。

彼等からしてみればスバルや少年は只の餌でしかないのだ。
その目で睨まれたスバルは一瞬奮えてしまった。

だが、すぐに顔を強張らせる。
そして。

「い・・・いやあああああああ！」

思い切り木の枝を振り上げて獣に襲い掛かった。

しかしその一撃が獣に当たる事は無かった。

木の枝ごと獣の尻尾の一撃がスバルを吹き飛ばしたのだ。

「きゃあああああ！」

威力が強すぎたのかかなり遠くへ吹き飛ばされるスバル。

獣達は見失ったスバルを探そうとはせずに、動けない少年の方に視線を移した。

「ひっ！・・・来るな！来るなあああああ！」

少年が両腕を必死に振るって抵抗する。

だが、それも空しい抵抗であった。

獣達は鋭い鉤爪を振るい少年の腕を切り裂き、首を切り落とし、内臓を引きずり出した。

少年の断末魔の悲鳴が響き渡る。

しかしそれを聞いて駆けつける者など居ない。

獣達は少年の肉を、血を、骨を全て胃の中に収めてしまった。
後には残骸しか残って居ない。

そして、其処には死と血の匂いで満たされていたのだ。

だが、これはスバルにとって不幸中の幸いでもあった。

もしこのまま獣達と戦っていたらスバルは間違いなく少年と同じ道を辿っていたであろう。

だが、スバルに・・・彼女に迫る地獄はまだ始まったばかりなのだ。そう、彼女にとって修羅の・・・殺人鬼としての道はまだ始まったばかりなのだ。

修羅世界（後書き）

・・・グロイ！グロすぎる！

銀時

「自分で書いてて言うなよ！」

だけどこれは流石にグロかったな

銀時

「でもこっから先もつと大変なのが待ってるんだろう？」

うん・・・頑張る

銀時

「おう、頑張れ！」

飢餓（前書き）

生きる上で大事な事・・・

それは『食べる』事

だが、この世界で人間は『食べられる』側なのだ

飢餓

目を覚ましたスバルが見た物・・・それは、先ほどまで息のあった筈の少年の亡骸であった。

嫌、それは最早亡骸とも呼べない代物と化していた。

残骸・・・そう呼んだ方がしっくり来る形である。

今日の前にあるのは獣に食い荒らされ残骸と化した肉片が其処に転がっていたのだ。

それを見た途端、スバルは恐怖した。

一歩間違えれば次にこの姿になっているのは自分なのだ。

すると、辺りから獣の鳴き声が聞こえてきた。

周囲から多種多様な声が響く。

あたかも、『獲物を見つけた』と叫んでいるようにも聞こえた。

空腹の腹を満たす為に、獣達は獲物を追い求めて彷徨う。

そして見つけた獲物を見て吠えるのだ。

まさか、次に狙われているのは自分なのは・・・

「に・・・逃げない！」

咄嗟に、殆ど本能的にスバルは動いた。

場所なんて分からない。

只、獣の声から逃げたかった。

必死に草むらを掻き分けて逃げ惑う。

それでも尚獣達の声は止む事がない。

辺りから声が響くのだ。

スバルは走った。

走り続けた。

今彼女を突き動かしているのは生きる執念と、そして恐怖であった。

どれだけ走っただろうか。

既にフラフラな足取りになったスバルが目も虚ろなまま辺りを見回していた。

既に空は暗く、月の光が辺りを照らしている。

それから察するに丸半日は走り続けた事になる。

既にスバルの体は疲労と空腹でともに走れない状態であった。

だが、此処で倒れれば獣に見つかり食い殺されてしまう。

何処かに身を潜められる場所が無いか辺りを見回した。

すると、すぐ目の前にお誂え向きな空洞が見えた。

大きさからして小柄な子供位なら入れそうな大きさだ。

「此処なら・・・寝られる・・・かなあ・・・」

既にフラフラになり、まともな思考など持ち合わせていないスバルは藁にも縋る思いでその空洞の中に入った。

中はお世辞にも寝やすいとは言い難い状況でもある。

だが、少なくとも外で獣の恐怖に怯えながら過ごす事は無いらしく、

スバルはその空洞の中で猛烈な睡魔に襲われた。

翌朝、スバルを突き動かしたのは猛烈な飢餓感であった。

丸半年走り回った上、まだ何も口にしてないのだ。

あの空洞の中で過ごしていれば獣に襲われる心配はないのだがあの中は狭い上に食べ物が生じていない。

あのままあそこに居ては餓死するのを待つだけである。

その為勇気を振り絞って外に出て来たのだ。

「はぁ・・・お腹空いたなぁ・・・」

仕切りに鳴り響く腹に手を添えてスバルが呟いた。

今にも倒れそうな位だ。

とにかく何かを見つけて食べたい。

そしてこの空腹を癒したい。

そう思えたのだ。

しかし、歩いても歩いても見つかるのは実のなっていない葉ばかりである。

その上周囲からは未だに獣の鳴き声が響き渡る。

そして、時々響き渡る人間の悲鳴。

恐らく何処かで獣の犠牲になったのだ。

人間の悲鳴が響く度にスバルの肩がビクツと震えた。

次にこの悲鳴を上げるのはもしかしたら自分なのかもしれない。

そんな思いがスバルにとてつもない不安を募らせたのだ。

「怖い・・・怖いよぉ・・・」

空腹と恐怖に戦いながらスバルは必死に歩いた。

泣きたい・・・大声で泣きたかった。

だが、その泣き声を察知して獣達が押し寄せてくるかも知れない。スバルはそう思いグツと泣くのを堪えた。すると、どうだろうか。

目の前にはまるでイチゴの様な実がなっている木を見つけたのだ。しかも大きさがかなりある。多分スバルと同じ位の大きさがあるのだ。

「うわぁ・・・大きい」

それを見たスバルの目が輝いた。

あれだけの大きさならきつと空腹を癒せる筈なのだ。

そう思うとスバルの足が自然とその木の実に向って動き出した。

気付いていないのだが、スバルの口からは滝の様に涎が垂れている。その様が彼女が今まで何も口にせずに過ごしていた事を安易に想像させられた。

そして、ゆっくりと実に近づこうとした時であった。

「退け！」

「きゃぁー！」

何時から来たのだろうか。

別の少年がスバルを押しつける。

力のなかったスバルはそのまま押された方向に倒れる。

そして押し倒した少年を見る。

少年もまた飢えていた。

頬は凹んでおり、顔色も悪い。

明らかに此処数日何も食べていない顔である。

「な、何するの？」

「これは俺の物だ！お前はすっこんでろ！」

「そ、そんな・・・私だっ
てお腹空いてるんだよ！私にも食べさせてよ！」

「ふざけんな！この実は俺だけの物だ！お前は来るな！来たらお前も食っちまうぞ！」

そう言つて少年は持つていた鋭利な石で出来た刀をスバルに向ける。

そんな物があつてはスバルには対抗出来ない。

第一、今のスバルはまともに歩く事も出来ないのだ。

已む無く諦める事にしたスバル。

そんなスバルの目の前で少年は木の実を掴む。

そして思い切り齧り付こうとした……正にその時であつた。

ガバ
アツ
！

地面からそんな音が響いた。

かと思うと、先ほどの少年の下半身を巨大な植物の化け物が丸呑みにしていたのだ。

そして腰辺りにはその植物の牙が突き刺さり血が噴出していた。

「ぎゃ ああああああああ！痛い！痛い！！」

少年が泣き叫びながら石の刃物を突き刺す。

だが、植物の口は硬くその程度では全く傷つかない。

それどころか徐々に少年の体がその植物に飲み込まれていく。

「痛い！痛い痛い痛い！！助け・
・助けてええええええええええ！」

やがて少年からは悲痛の声しか聞こえなくなった。

そんな少年の事などお構いなしに植物の怪物は徐々に少年を腰から胸、胸から首にと飲み込んでいく。

そしてやがて少年は植物に飲み込まれてしまった。

全てを飲み込んだ植物の口が歪に動く。

恐らく中で少年をグチャグチャに咀嚼しているのだ。

スバルはその光景を只見ている事しか出来なかった。

自分とそれ程変わらない年の少年が今、目の前で怪物に食べられてしまったのだ。

その光景にすっかり恐怖してしまったスバルは全く動く事が出来なかった。

やがて、食事を終えた植物は元の地面に潜ってしまった。

「あ・・・ああ・・・あああああああああああああああああああああ
ああああ！」

その直後、スバルは大声で泣き叫んだ。

叫ばずには居られなかったのだ。

目の前で、目の前で少年が食い殺されたのだ。

しかも、もしあの時少年が木の実を横取りしなかったら、その時は自分がその実の持ち主の餌食となっていたのだから。

尚更スバルは泣き叫んだ。

少年の食い殺される現場を目撃した瞬間、彼女の中にあつた恐怖が一気に噴出したのだ。

それが爆発し、スバルは声一杯に泣き叫んだのだ。

だが、それが災いしてしまったのだ。

気がついたらスバルは獣の下敷きになっていた。
目の前からは爬虫類特有の生臭い匂いと血の様な匂いがしてきたのだ。

スバルはゆつくりとトカゲの上から逃げる。

するとその目の前では先ほどスバルに襲い掛かって来た獣が事切れていたのであった。

「ど・・・どうして?・・・あ!」

見ると獣の心臓辺りには先ほど少年が持っていた石の刃物が突き刺さっていたのだ。

どうやらあの時少年はその石の刃物を手放してしまっていたようだ。だが、これのお陰でスバルは獣から身を守ったのだ。

それだけではなく、目の前には念願の食べ物が出来たのだ。

トカゲの肉。

それを察知した途端スバルの体が動いた。

そして、形振り構わずトカゲの体に歯を突き立てる。

「あが・・・あがが!」

必死にその肉を食らおうともがく。

だが、トカゲの鱗は硬く歯が全く通らない。

疑問に思ったスバルだが、今度は胸に突き刺さっていた石の刃物を使い更に傷口を押し開いた。

中から鮮血が飛び散りスバルの顔や服に付着する。

だが、そんな事お構いなしにスバルは傷口から見える肉に思い切り齧り付いた。

調理など必要ない。

味など関係ない。

只、只空腹を満たしたい。

そんな思いだけがスバルの中にあつたのだ。
その時のスバルの姿は・・・正しく『獣』と言える姿であつた。

飢餓（後書き）

またグロイ展開になってしまった

銀時

「なあ・・・この展開あとドンくらい続くんだけ？」

多分暫く続くと思う。何しろ１年間生き残らなくちゃならないし

銀時

「とことん容赦ないなあ作者」

まあね

地獄の終り・・・そして始まり（前書き）

今回で遂に1年経ちます

そしてそれはスバルの修羅への第一歩となります

地獄の終り・・・そして始まり

時が経つのは早い物である。

目の前には一面深い森が見える。

その森からはただただ「死」の気迫だけが漂ってきていた。

その森こそが幼い若人が修羅になる為の第一の試練である。

あの森で幼い若人達は一年の間生き抜き晴れて修羅となれるのだ。

その森を見下ろせる位置にある崖の上に一人の青年が座っていた。

赤い髪が風に揺られて自然に靡いていく。

青年の顔にはうつすらと無精髭が生えておりその顔色はすっかりやつれた形であった。

それでも青年の瞳はしっかりと目の前にある死の森を見据えていた。まるで何かを待っているかのように。

「フォルカ」

後ろから声が聞こえた。

呼ばれたフォルカはそのまま上半身だけ振り返る。

其処には銀色の長い髪をした青年が居た。

その青年の手には体長約40cm程の爬虫類の生き物が握られていた。

首筋からはトドメとも言える一撃の跡がついており其処から血が滴り流れている。

流れ出た血は爬虫類の顔を伝いそのまま地面に落ちて大地を赤く彩っていく。

青年はズイと爬虫類の亡骸をフォルカに差し出した。

「飯だ。食え」

青年はそう言つてフォルカに爬虫類の亡骸を差し出す。

だが、フォルカは食べる気になれなかった。

今のフォルカの中にあるのは只一つの感情であつた。

それは罪悪感であつた。

自身の罪を悔いていたのだ。

何故フォルカが悔いるのか。

それはあそこに佇む死の森に関係があつた、

あの森にフォルカは一年前一人の少女を放ってしまったのだ。

それはかつてフォルカが異界で任務に赴いた際に出会い、救つてしまった幼い少女であつた。

修羅の世界には掟がある。

それは、異界の者とは接触してはならない事である。

もし接触した場合その者を殺さねばならないのだ。

修羅は門外不出の種族である。

戦いのみを生き甲斐とし常に戦いで己を鍛え上げていく種族である。だが、異世界への進攻は一切しない。

それが彼等修羅の掟でもあつた。

故に彼等は異界との接触を断っているのだ。

それをフォルカは犯してしまったのだ。

幼い少女の命を救う為にフォルカは彼女に顔を見られてしまったのだ。

本来ならその場でその娘を殺すのが当然である。

だが、フォルカにはそれが出来なかった。

だが、このままではどの道少女は修羅の刺客により殺されるのは必定である。

それを回避する唯一の方法が、彼女を修羅にする事であつた。

「辛いのは分かる。だが、それで前が死んだらどうする?」

青年の顔が何時になく険しくなる。

爬虫類の尻尾を握っていない空いている手を硬く握り締めてフォル力の前にその握り締めた拳を見せる。

その拳をフォル力は見ていた。

青年の拳が震えている。

それからかなりの力が込められているのが安易に予想できた。

ポタリ・・・

青年の拳から赤い雫が滴り落ちた。

握り締めた拳に爪が食い込み肉を貫いたのだ。

それでも青年は拳を握るのをやめない。

ずっと硬く握り締めたままフォル力の前に立っているのだ。

「お前が死んだら、その時は本当にあの娘。スバルは一人ぼっちになるのだぞ？それはこの世界では死を意味する。お前は自分で救った幼い命を自らの手で摘み取るつもりか？」

青年が言う。

その言葉にフォル力は反論する事が出来ず、只首を横に振るだけであつた。

既にフォル力は1ヶ月以上何も口にしていない。

嫌、フォル力はある時からずっと此処に座りっぱなしであつたのだ。

只、スバルの無事を祈るかのようにならずと座っていたのだ。

今もあの森の中でスバルは飢えと死の恐怖と戦っているのだ。

凶暴な獣と死闘を繰り広げ、その肉を食らい、今日一日を必死に生き抜く。

これは若者が修羅になる為に必ず通る道である。

フォル力や青年も経験した道である。

故にフォル力は止める事が出来なかった。

この試練を通過しなければ修羅になれないのだ。

修羅になる為には一年の間あの森で生き抜き此処に戻ってこなければならぬのだ。

それまでフォルカは死ぬ訳にはいかない。

自分で救った命を自分の手で摘み取るなんて最高に馬鹿らしい。

そう思えたフォルカは青年から爬虫類を受け取ると主室にその腹に齧り付いた。

爬虫類の薄い皮ごと肉に歯が食い込みそれを引き千切り咀嚼する。

千切られた部分からは血が溢れ出る。

赤い血がポタポタと流れ落ちて地面を濡らす。

その血をフォルカは嚙り喉の渴きを潤した。

そしてまた食べる。

肉も、皮も、内臓すらもフォルカの口の中へと消えていく。

やがて爬虫類は骨だけの存在となった。

残骸をすぐ側に放り捨ててフォルカは口元を乱暴に拭う。

顔には僅かだが生気が戻っていた。

「フォルカよ。スバルの為にもお前は死ぬ訳にはいかないのだ。奴が帰ってくるその日まで待ち続ける事。それもまた貴様の修練でもある」

青年がフォルカの肩に手を置いて静かに語った。

それにフォルカは力なく頷く。

「義兄さん・・・俺のやった事は本当に正しかったのだろうか？」

フォルカが力なくそつと呟いた。

「どう言う事だ？」

フォルカの言葉に青年は尋ねる。

フォルカは森を見ながら会話を続けた。

「あの時俺は咄嗟にスバルを救う為には言えアイツを元の世界では生きられない様にしてしまった。もしかしたらあの時他の誰かが助けに来たのかもしれない。それを俺が介入した為にアイツの人生を狂わせてしまったのかもしれない」

フォルカが自身の胸中を語る。

それこそがフォルカの罪悪感である。

本当なら今頃スバルは年頃の少女である。

友達と学校で学問を学び平和な人生を送れたのかもしれない。

それを自分が助けたために何時死ぬかも分からない世界に導いてしまった。

此処は正に死の世界である。

力の無い物は力のある物に食われる弱肉強食の世界。

生き残る為には強くならなければならない。

泣き言や弱音はそのまま死に直結する。

そんな世界にあのスバルを連れてきてしまった。

それがフォルカの罪悪感であったのだ。

「それは違うぞ、フォルカ」

フォルカの言葉に青年は異を唱える。

「あの時お前が助けに入らなければもし誰かが助けに来たとしても僅差でスバルは下敷きになっていた。それに、この道はスバル自らが選んだ道だ。俺達にとにかく言う権利はない」

「しかし・・・俺は」

青年の言葉を聞きながらも未だにフォルカは納得できないのか答え

を洪る。

それを見ていた青年は呆れたかの様に溜息をつく。

「それならば、スバルが生きて戻ってきたらお前の弟子として向かえればよいではないか」

「俺の？」

フォルカが驚いた顔をして青年を見て尋ねた。

それに青年は頷く。

修羅世界にはもう一つの掟がある。

それは師弟の関係である。

一度師弟の関係を結んだ者達はそのまま義兄弟となる。

修羅世界での師弟は全てを共に過ごすのだ。

それも寝食共にである。

それはまだ力の無い弟子を師匠が守る為である。

修羅の中には幼いながらもかなりの覇気を持った者も居る。

その者を狙って別の修羅や修羅獣が食らいに來たり攫いに來る事があるのだ。

だが、まだ力の無い若者ではそれを跳ね除けられる筈がない。

故にそれを師匠が守るのだ。

親が子を守るかのように師匠は弟子が巣立ち出来る様になるその日まで片時も離れず見守るのだ。

「俺に・・・その資格があるでしょうか？」

「それは分らん。だが、お前はスバルを弟子にする義務がある。

他の者ではたちどころにスバルを殺してしまう。お前しかスバルを守る者は居ないんだ」

自信の無いフォルカに青年は語る。

それを言われたフォルカは拳を目の前に持って來てそれを硬く握り

締めた。

決意の表れである。

そしてフォルカは立ち上がる。

フラフラとしていたが、だがしっかりと二本の足で大地を踏み締め
て立ったのだ。

「アルティス義兄さん。俺はなる！あいつの・・・スバルの師匠に
俺はなる」

「それで良い。それでこそ私の弟だ」

決意し立ち上がったフォルカを見て青年アルティスは笑みを浮かべな
がらフォルカの肩を叩く。

この二人もまた師弟の契りを結んだ中である。

つまりフォルカにとってアルティスは兄同然の存在なのだ。

「さて、まずは顔を整えて来い。師匠がそんな仏頂面では格好が立
たんぞ」

「はい、分かりました」

フォルカは頷きそのまま脱兎の如く飛翔して去っていく。

すっかり元気になった姿のフォルカを見てアルティスは満足気に頷
いていた。

それとは入れ違いで別の青年がアルティスの元を訪れる。

蒼い髪をしその瞳からは殺気が強く感じられる危険な雰囲気を持つ
た青年である。

「アルティス義兄さん。さっきフォルカに会いました」

「うむ、奴もついに決心したのだ」

もう一人の青年の前でアルティスは頷く。

それを聞いたもう一人の青年フェルナンドはフツと静かに笑みを浮かべた。

「それは良かった。あのままのフォルカなど倒す価値もないからな」
「共に技を磨きあつたライバルであるが故の心配……か」

アルティスの呟きにフェルナンドは頷く。
その通りだからだ。

別に否定する要素は何処にもない。

「しかしあのフォルカが師匠に？あんな甘い奴が本当になれるんですか？」

「確かに修羅としては失格だ。だが腕前は貴様も分かるだろう。師匠には十分向いている」

アルティスが太鼓判を押す。

それにフェルナンドは首を傾げる。

どうやら彼はまだ認めていないようである。

「俺にはアイツが師匠の器には向かないと思うんだがなあ」
「ならばお前がなるか？」

アルティスがフェルナンドの顔を覗き込みながら尋ねる。
それにフェルナンドは首を横に振る。

「遠慮しておきます。俺はまだ弟子を持つ気はない」

フェルナンドはそう言いまた彼も脱兎の如く飛び去っていく。
話を終えた以上此処に長居する必要はないからである。
やがてアルティス一人になる。

すると振り返り死の森を一瞥する。

（修羅達が最初に通る試練の一つ、死の森。この森で修羅の素質を確かめることが出来る。修羅に必要なのは生きる事への執念と闘争本能。その二つをこの森で養う事が出来る。だが、この森に入って生きて出てきた者達は100人中多くても10人・・・果たしてその中にスバルは含まれているだろうか？）

腕を組み難しい顔をしながらアルティスは森を見据えた。

そして、遂に約束の1年が過ぎ去ろうとしていた。

森の切れた平原の上には修羅王とその側近である將軍のミザル。

そしてフォルカ、フェルナンド、アルティスの三名が立っていた。

森の中から続々と若人達が出てくる。

皆殺気と闘争心に満ちた目をしている。

今にも襲い掛かりそうな目である。

「ほおう、今年は数が多いな。これで我等の手駒が増えると言う物よ」

今年の成果を見てミザルが満足気に語る。

目の前には既に20名以上の若人達が集まっていた。

これは正しく異例である。

毎年森から出てくるのは10名位なのだ。

それが今は20名以上は集まっている。

それがミザルには嬉しいのだろう。

だが、フォルカの顔は暗かった。

その20名の若者達の中にスバルが含まれて居ないからだ。

全てを見回したがスバルの姿は何処にも見当たらない。

フォルカはすっかり暗くなり俯いてしまった。

「どうやらこれで全てのようですな」

「むむ、今からよりうぬら若人を修羅と認める。これより修羅の道を歩み共に阿修羅地獄を突き進もうではないか！」

天に拳を突き上げて修羅王が強く語る。

それを聞いた若人達が一斉に雄たけびを上げる。生きて出られた事の喜びを体全体で表したのだ。

それを見て修羅王の顔に笑みが浮ぶ。

アルテイスとフェルナンドも同様である。

ミザルに至っては今にも笑い転げそうな勢いなのだ。

だが、フォルカは未だに暗いままである。

やがて、若人達を連れて引き上げようとした正にその時であった。突如森にざわめきが響いた。

かと思うと突如として森から何かが飛び出して来た。

それは一直線に修羅王目掛けて飛び込んできた。

「む！」

修羅王は片手でそれを掴んだ。

それは木で作られた槍である。

そしてそれを握っているのは殺気と狂気に満ちた目をしたスバルであった。

「スバル！」

「おのれ小娘！ガキの分際で我等が王に手を上げるとは無礼な奴！即刻処刑してやる」

ミザルが怒り狂い修羅の兵士達を呼ばうとする。だが、それを修羅王が止める。

「よい、余興だ」

笑みを浮かべながら修羅王はパツと手を離す。

そのままスバルは地面に降り立つと槍の切っ先を修羅王の喉下に向ける。

その目からは殺気と狂気、そして怒りが見えていた。

「憎いか？この我が・・・うぬを死の森に追いやった我が憎いか？」
「ううう・・・うあああああああああ！」

雄たけびを上げながらスバルは得物を振るう。

だが、それを修羅王の手刀が迎え撃った。

乾いた音が響き、宙を弧を描くように何かが舞っている。

それは木の槍であった。

半分以上が手刀により切り取られ宙に舞ったのだ。

スバルの手元にあるのは最早使い物にならない木の得物である。

「ならば己が拳で挑め！我を倒してみせよ！」

修羅王が拳を突き立ててスバルに言う。

スバルは言われるがままに使い物にならない得物を放り捨てて拳を握り締める。

構えは滅茶苦茶で生き抜く為に身につけた我流とも見える。

いや、これは我流と言うのもおこがましい物であった。

「うおおおおおおおおあああああああ！」

再び雄たけびを上げてスバルが飛びかかる。

拳が、蹴りが、修羅王に向けて放たれる。

だが、それを修羅王が涼しい顔でかわし、いなし、捌く。

スバルの一撃は修羅王に掠りもしないのだ。
まるで子供と大人の喧嘩・・・嫌、それよりも酷い状況であった。

「くっ、うおおおおおおお！」

意を決し距離を一旦置いて其処から一気に飛びかかる。
だが、それを迎え入れたのは修羅王の拳であった。

「温いわ！」

一喝する一言が修羅王の口から放たれる。

それと同時にスバルの腹部には修羅王の拳が突き刺さる。
衝撃のあまりスバルの体がくの字に曲がる。

口からは鮮血が数滴吐き出されて更に悲痛の声が上がる。

腹を抑える様な形ではあるがそれでもスバルは修羅王の前に立ち彼を睨んでいた。

「その気迫やよし、だが攻撃とはこうするのだ！」

修羅王が更に一喝し今度は怒涛の如く修羅王の攻撃が放たれた。
スバルの目には修羅王の拳が流れる滝の雫の一粒一粒の如き勢いで放たれてるように見えたのだ。

実際には修羅王が常人離れた速さで突きを放っているだけである。
しかしそれがスバルには修羅王は阿修羅神の如く腕が何本もあるかの様な錯覚に見舞われた。

しかし彼女の思考は其処で途切れた。

修羅王の攻撃を全身で受けてやがて大地に倒れてしまったのだ。
全身くまなく突きを食らいボロボロになったスバルは仰向けに倒れる。

呼吸は荒く最早立ち上がる気力すらない。

「これまでだな。修羅王に刃を突き立てたこの娘は直ちに処刑だ！このワシ自らが葬ってくれるわ！」

ミザルが修羅王に代わり前に進み出て両手に覇気を纏う。だが、そんなスバルを庇うかの様にフォルカがミザルの前に立ちそして片膝をついた。

「ミザル將軍。お願いがございます！どうかこの娘を・・・スバルを私の弟子にさせて下さい」

「ならん！修羅世界に置いて修羅王は神に等しい存在！その修羅王に刃を向ける事は神を冒瀆するに等しい愚行！死すら生温い罪だ！」

フォルカの願いを一蹴しミザルが再び両手に覇気を纏う。

しかし、それでもフォルカは退こうとはしない。

そんなフォルカにミザルは苛立ちを感じた。

「退けい！退かねば貴様も同罪！共に死罪を与えるぞ！」

「この身を悪鬼羅刹の道に捧げてから既に覚悟は出来ております。死など恐れません」

「良くぞ言った。ならば小娘共々地獄へ行くが良い！」

ミザルが叫びフォルカに覇気の纏った手を振り翳す。

だが、その手を修羅王が掴み止める。

それに驚いたミザルが修羅王の顔を見る。

「良い、余興と言った筈だ」

「しゅ、修羅王様がそう言うのでしたら・・・命拾いしたな、フォルカ！」

未だに修羅王の言い分に納得しないのかミザルは不満な表情のまま下がる。

それに代わり今度は修羅王がフォルカの前に立つ。

「フォルカよ。うぬは今日よりその娘の師匠となりうぬの全てをその娘に注ぎ込むのだ！」

「は！このフォルカ・アルバーグ！必ずやスバルを最強の修羅にしてみせます！」

修羅王の裁きにフォルカは感謝し両手を重ねて感謝の意思を示した。そして立ち上がり倒れて動かないスバルをそっと抱き上げた。

「スバル、これが俺の罪滅ぼしになるかは分からない。だが、俺の全てを・・・お前に捧げる。お前が最強の修羅になるその日まで、俺はお前お守り抜いて見せる！」

意識のないスバルに向かいフォルカはそう告げた。

今日この日、スバルとフォルカは師弟の、そして義兄妹の契りを交わしたのである。

だが、スバルの試練はまだまだ始まったばかりである。

それを今この時のスバルが認識しているかどうかは・・・誰も知らない事であった。

地獄の終り・・・そして始まり（後書き）

次回からスバルの修羅への戦いの日々が始まります
では

出会い（前書き）

今回でスバルは運命の出会いをします

出会い

スバルがフォルカの元に正式に弟子入りしてから実に1週間が経っていた。

その間、スバルはフォルカの指導の元厳しい修練に励んでいた。

「よし、スバル！打ち込んで来い！」

「はい！てえええやああ！」

雄たけびを上げてスバルはフォルカに飛び掛ってきた。

そして猛烈な勢いで蹴りを放つ。

だが、その蹴りをフォルカはあっさりと片手で受け止める。

「温い！」

そしてその一言を放ちスバルの腹に一撃を放ち吹き飛ばす。

吹き飛ばされたスバルは地面に激突し腹を抑えながらも立ち上がる。

「ま、まだまだあ！」

「よおし、来い！」

気合十分のスバルを見てフォルカが叫ぶ。

それから二人の激しい乱取りが行われた。

時間的に数十分経った後・・・其処には腕を組んで立っているフォルカとは対照的に大の字になって倒れているスバルが居た。

「ま・・・まだ・・・まだあ・・・」

「今日は此処までだ・・・無理をして体を壊しては元も子もないだろっ」

「し・・・しかし」

倒れながらもまだ戦おうとするスバル。
だが体は正直らしく全く動こうとしない。
そんなスバルに向かいフォルカがそつと手を差し出す。

「今日はゆっくり休んで、明日また修練すれば良いだけの事だ」
「・・・はい」

諦めたのかスバルはフォルカの手を取り立ち上がる。
立ち上がったスバルを見てフォルカはやわしく微笑む。

「よし、今日は汗を流して腹ごしらえして寝るぞ」
「はい！」

フォルカの言葉にスバルは元気良く答える。
以前とは打って変わって殺気のそれは消えていた。
そして、今はフォルカを師匠として、そして義兄としてフォルカに
教えを乞う事となっていたのだ。
そうなってから実に1週間は経っていた。

「・・・」

フォルカは歩きながら黙って自身の腕を見た。
其処には多数の痣が出来ていた。
スバルとの修練の末に出来た傷である。

（たった1週間だと言うのに此処までの傷を付けられるとは・・・
スバルの成長振りには驚かされるな）

正直言つてフォルカ自身も驚いていた。

たった1週間程度では言えスバルの实力はメキメキ上がっていた。しかし一人前にはまだまだ程遠い位でもある。

それだとしても此処まで成長したのはフォルカにとっては喜ばしい事であつたのと同時に悲しい事でもあつた。

本来ならスバルは普通の少女として生きられる筈だつたのだ。

それをフォルカが彼女の人生を狂わせてしまったのだ。

故にフォルカは彼女を命がけで守る事を決めたのだ。

その方法はこうして彼女を自身の弟子にする事だけであつた。

修羅達の利用する大浴場。

大浴場と言っただけあり大きさも外装もなかなかの物であつた。

現在は時刻的に利用する者達が居ない為か中に居るのはフォルカとスバルだけである。

「つつ！！！」

「傷が痛むか？」

修練の末についた傷を抑えるスバルを見てフォルカが尋ねる。

「は、はい・・・ですがすぐに治まると思います」

「そうだな。その痛みはやがてお前の血肉となるだろう」

フォルカは優しくそう言う。

それにスバルが笑みを浮かべて頷く。

読者の皆様は疑問に思うだろう。

何故女のスバルが男湯に居るのか？

それは修羅の世界の常識が故である。

修羅の世界において師弟関係とは家族の関係のそれと匹敵する物なのだ。

即ち弟子にとって師匠は本当の父に等しい存在になる。

と、言うのも若い修羅には無限の可能性が秘められている。

それ故に若い内に狙われる危険性が高いのだ。

別の修羅に力を奪われるか、もしくは危険な修羅獣の餌食となるか。

どちらにしても修羅になったからといって安心は出来ないのだ。

だからこそ師匠は命がけで弟子を守り、そして技を伝えるのだ。

故に師匠と弟子は衣食住全てを共にする義務がある。

無論風呂や寝食を共にする事など当たり前である。

だが、だからと言って安心してはいられない。

もし、弟子に見込みがないと師匠が判断したらその場で切り捨てられる場合もあるのだ。

故に弟子は命がけで師匠から技を盗み自分の物にしなければならぬのだ。

言うなればフォルカの様な師匠は珍しいと言える。

「義兄さん、背中を流します」

「ああ、頼む」

互いに浴槽から上がり、フォルカはスバルに背中を流してもらった。スバルには鍛え上げられゴツゴツした手触りのするフォルカの背中が何よりも頼もしく見えた。

ふと、スバルはフォルカの背中に手を置く。

「どうした？」

「大きい、凄い大きいなあ・・・と思ひまして」

「そうか、さて、早く上がるとしよう。腹が減っただろう。今日はお前の好物のオオトカゲの丸焼きだ」

「本当ですか！？」

フォルカのそれを聞いた途端スバルの目が輝く。

余程好物らしい。

風呂場から上がり、スバルとフォルカを出迎えたのはアルティスとフェルナンドの二人であつた。

「アルティス義兄さん！フェルナンド義兄さん！」

「遅かったな。待ちくたびれたぞ」

「さて、全員揃つた事だ。頂くとしよう」

席についた四人は皆手を合わせて食事に入る。

机の上には体長役4mはあるであろう大きなトカゲが丸焼きになつて置かれていた。

修羅の世界において食事は常に自給自足なのだ。

食材は自身の手で取ってくる。

これは当たり前的事である。

故に修羅の世界では強くなくては生きられないのだ。

そして、今回の食事はスバルの大好きなトカゲの丸焼きであつた。

こんがりと皮面には焼き色がついており、皮を捲ると油の乗った肉が音を立てて肉汁を垂らして出迎えてきた。

思わず生唾が飛び出す。

これの食し方は至ってシンプルである。

腕を食べたい場合は腕を千切りその皮ごと肉を頬張れば良い。

足も同様である。

皮は生だと硬くて食えないのだが焼けば魚の皮の様にパリパリした食感になりそれが中の肉と非常に良く会うのだ。

しかし何と言っても一番美味しいのは腹の肉である。

筋肉と脂肪の絶妙なバランスにより生み出される旨味は極上である。その為、腹の肉は常に奪い合いになる。

「フォルカ！その肉は俺のだ！勝手に取るな！」

「嫌、幾ら貴様の言い分だとしてもこれは譲れない！」

「いいえ、私も同じです！これは私のです！」

「三人とも、少しは落ち着いて食事をしたらどうだ？」

肉をがつつく三人とは打って変わって、アルティスはとても上品に食べている。

皿に切り分けた肉を置きそれをナイフとフォークを使い一口サイズに切って口の中に放り込んでいく。

弟や妹達の手前上そうしている様にも見えるが単にそうして食べるのが習慣づいているだけであろう。

何はともあれ騒がしくもにぎやかな食事を終え、フォルカとスバルは共に寢床についた。

「スバル、明日も修練をやるぞ。しっかりついて来いよ」

「はい、義兄さん」

フォルカの言葉にスバルは強く頷く。

そうして二人は静かに眠りにつくのであった。

翌朝、何時もの訓練場に今はスバル一人で来ていた。
一人で素振りをしている。

「はあ！せい！」

掛け声を上げながら拳や蹴りを放つ。
現在此处にはスバル一人しかない。
何時も訓練場に最初にスバルはやってきてこうして体を温めておくのだ。

そうしてフォルカがやってきた際に組み手が行われると言う仕組みなのである。

しかし、これには盲点があった。

それは、組み手の準備をしている間フォルカとスバルは離れ離れになっている事である。

その為・・・

「あれがそうか？」

「ああ、あれがフォルカ様のお墨付きの修羅だ」

素振り中のスバルを遠めから眺める数人の修羅達が居た。
皆不気味な顔をしている。

その笑みの中には殺気が感じ取れた。

「どうする？やるか」

「当たり前だ！あんな奴があの方フォルカ様のお弟子になるとはおこ

がましい・・・この場でくびり殺してやる」

そう言い会々と修羅達が動き出した。

何故スバルの命を狙うのか。

それは即ちスバルを殺し自分がフォルカの弟子になる為である。

修羅の世界において強い修羅の弟子になる方法は二つある。

一つはその修羅の可能性を師匠が見出し弟子にする事。

もう一つはその弟子を殺し自分が弟子になる事である。

修羅の世界において情けは無用の長物。

力無き者には死しか与えられない。

生き残る為には強くなるしかない。

誰よりも。

そして、この修羅達も生きる為にこうしてスバルを襲う事にしたのだ。

「行くぞ！」

修羅達のリーダー格が合図を送り、一斉にスバルの前に現れた。

「あ、貴方達は？」

「お前には関係ない。何故なら・・・お前は今から俺達に殺されるんだからなあ！」

「な！どうしてそんな事を？」

「問答無用！ぶっ殺せ！」

『おっ！』

リーダー格の修羅が叫び、それと同時に三人の修羅達が襲い掛かってきた。

「くっ！」

スバルは咄嗟に構える。

だが、それよりも早く修羅達が攻撃を仕掛けてきた。

「ハハハッ！所詮はヒヨッコだなあ！そんな悠長に構えていたら殺して下さいと言っているようなもんだぞ！」

修羅達が笑いながら攻撃を仕掛けてくる。

それに対しスバルは防戦一方であった。

いかに死の森で闘気を鍛えたスバルとはいえ、まだ本当の戦いの経験の無いスバルには厳しい物であった。

「ぐうつ！」

修羅の一撃が急所に当たり体勢を崩す。

其処へ畳み掛ける様に修羅達が攻撃を仕掛けてきた。

拳が、蹴りが、無数の突きがスバルに向かい襲い掛かってきた。

四方からスバルを取り囲んで殴る蹴るの暴行を行う修羅達。

暫くしたら修羅達の目の前にはボロボロになり仰向けになって倒れるスバルの姿があった。

全身に酷い傷が出来最早立ち上がる事も出来ない状態であった。

そんなスバルを修羅達が見下ろす。

そのどれもが下卑た笑みを浮かべている。

「さて、こいつを殺した後誰がフォルカ様の弟子になるか・・・」

「それもまた殺し合いで決めれば良い事だろう。何よりもまずはこいつにトドメを刺すのが先だろう」

「それもそうだな」

修羅達が動けないスバルを見て両手に覇気を集める。

そしてその纏った覇気での一撃を放とうとした時であった。
その覇気の一撃を別の覇気が遮った。

「何だ!？」

「やれやれ、女一人に男が四人がかりでやるたあ・・・それじゃ修羅の風上にも置けねえなあ」

「て、てめえは!」

修羅達が見た場所、それは先ほどまでその修羅達が居た場所であった。

其処には一人の修羅が立っていた。

青い長い髪を後ろで束ねて斜めに構えた顔つきをした修羅た其処に居た。

「てめえ!トウマ!!!」

「よお、お楽しみの所邪魔して悪かったな」

笑いながらトウマは修羅達の前に立つ。

そしてボキボキと腕を鳴らす。

「てめえ!まさかてめえもフォルカ様の弟子になるつもりなのか?」

「まさか?そんなつもりはさらさらねえよ。只・・・黙って見ていられなくてよお」

チラリと倒れているスバルを見る。

「男としちゃあこんな酷い事されてるのを黙って見過ごすなんぞ出来ないんでねえ」

「けっ!正義の味方気取りかよ!虫唾が走るぜ!」

「構うこたあねえ!こいつを先にぶっ殺せ!」

修羅達が殺気を放ちトウマに迫る。

だが、その修羅達の攻撃を悉くトウマはかわしていく。

「ほらほらどうしたあ？そんな蠅が止まるような突きじゃあ俺に当たるにやあ100年掛かるぜえ」

「ち、畜生！」

修羅達が怒り更に攻撃の速度を上げる。

しかし、それでもトウマにはかすりもしない。

「馬鹿だなあ・・・攻撃つてなあ、こうするんだよ」

途端にドスの利いた声になった途端トウマの手刀が目の前に居た一人の修羅の片腕をへし折る。

グニヤリとありえない方向に腕が曲がる。

「ぐわあ！腕が・・・俺の腕があ」

「野郎！」

他の修羅達がトウマに蹴りを放つ。

「とろいつつつてんだよ！」

だが、それにカウンター宜しくトウマが蹴りを放つ。
互いの蹴りがぶつかりあう。

結果は修羅の足が切断されと言う結果であった。

蹴りだけで修羅の足を引き裂いたのだ。

「ぎゃあー！」

「その程度の実力じゃあ弟子になった所でせいぜい3日が限度だな」
「舐めるんじゃない！」

最後にリーダー格が両手に覇気を込める。

そして覇気を込めた一撃でトウマに殴りかかってきた。

覇気を込めた一撃はそのままトウマに直撃する。

しかしトウマには蚊が刺す程度にしか効いていない様な顔をしていた。

「温いな。そんな薄汚れた覇気じゃ俺は殺せないぜ」

「う、薄汚れた・・・だとお！」

「教えてやるよ。これが俺の覇気だあ！」

トウマが深く息を吸い、そして体中から覇気を放つ。

その覇気の量は実にそのリーダー格の数倍は軽く上を行っていた。

「ひ、ひいいい！」

「今更命乞い・・・って話はないよなあ？」

「た、頼む！助けてくれ！い、命だけはあ！」

「へっ、しょうがねえなあ・・・その代わり」

トウマがニヤリと微笑む。

そして覇気を纏った手を手刀状にしてリーダー格の頭に向けて何度も突き付けた。

その間、終始リーダー格は動けなかった。

そのしぐさはほんの一瞬で終わった。

気がつくときトウマの手は元の位置に戻っていた。

「へっ？ど、どうなってんだ？」

「これにこりたら二度とこいつに近づくんじゃないぞ。残った髪が

大事ならな」

「へ？」

リーダー格の男はトウマの言葉が気になり懷から鏡を取り出して自分の頭を見る。

すると其処にはスキンヘッドの上に一本だけ天辺に残った髪がゆらゆらしている光景があった。

「な、なんじゃこりやああ！」

「ほれ、そいつの足だつて今なら間に合うぜ」

その場に落ちていた足をリーダー格に向けて投げ放つ。
リーダー格の修羅はそれを黙って受け取った。

「ち、畜生・・・覚えてろよ！この借りは何時か必ず返してやるからなあ！」

「へっ、やあだようだ！」

去っていく修羅達に向かいアツカンベーするトウマ。
そしてクルリと振り返る。

其処にはどうにか上半身だけ起き上がるスバルが居た。

「ひでえ事しやがるなあ。痛むか？」

「何故・・・助けたんですか？」

「ま、只の気まぐれつて奴か？それより・・・使つか？」

トウマがそう言って懷から傷薬を取り出す。
だが、スバルはそれを使おうとしなかった。
トウマを警戒しているのだ。

「遠慮するなよ。別に下心はねえよ」
「・・・すみません」

どの道今のスバルでは抵抗したところで今のトウマに一撃の下に殺されるだろう。

観念したスバルはトウマに治療を任せる事にした。

トウマは慣れた手つきで傷口に傷薬を塗る。

修羅世界は戦いが主な世界なだけに治療器具などは発展している。
大抵の傷なら塗り薬程度ですぐに直してしまえるのだ。

「貴方は珍しい人ですね。大抵の人なら私を殺すと言うのに」

「何だ？俺ってそんなに变か？」

「变です」

「正直だなあおい」

トウマが苦笑いを浮かべる。

それを見たスバルがふと、笑みを浮かべた。

「ほおう、お前の笑った顔・・・結構可愛いじゃねえか」

「か、からかつてるのですか？」

「好きにとりな・・・よし、終わったぞ」

手を叩き治療の完了を表す。

治療を終えたスバルはゆっくりとだが立ち上がる。

「あ、有難う御座います」

「なあに、良いって事よ。困ったときはお互い様って奴さ。例え修羅でもなあ」

礼を言うスバルにトウマは爽やかなな笑みを浮かべる。

「そう言えばまだ名前を名乗ってなかったな。俺はトウマ。トウマ・アズマって言う」

「名前は分かりません。只、義兄さん達は私の事をスバルと呼びます」

「スバルか・・・良い名だな」

「貴方こそ」

トウマとスバルは互いに笑いあった。

これこそが、後に悲しき運命をたどるであろうスバルとトウマの初めての出会いであった。

その二人を壁の向こうでフォルカは見ていた。

本当ならフォルカはすぐにでもスバルを助けに行きたかったのだ。

だが、無益な情けは彼女をより過酷な地獄へと落としてしまう。

それに、師匠が弟子同士の小競り合いに手を出した場合その弟子は一人では生きてはいけぬと判断され掟にそって処罰されるのだ。

弟子同士の小競り合いは弟子自らが解決しなければならないのだ。

辛い世界である。

しかし、それこそが修羅の世界なのだ。

出会い（後書き）

多少本編とは違うかも知れませんがこれこそがトウマとの初の出会いです。

見え隠れする陰謀と新しい弟子（前書き）

今回は余りグロイシーンはないと思いますので安心して下さい

見え隠れする陰謀と新しい弟子

組み手を終えたフォルカはスバルを見た。

目の前では相変わらず疲弊しきり荒い息遣いのスバルが居る。

しかし体には以前より傷が減ってきていた。確実に腕前が上がってきているのだ。

それにフォルカは疑問を感じた。こうも短期間にスバルの腕が上がる様に鍛錬した覚えはないのだ。

あくまでフォルカは最初にスバルが修羅世界に馴染ませる為の修練が目的であった。

その為腕前の向上は二の次であった。それがどうした物か。気がつけばメキメキとスバルは実力をつけているのだ。

それがフォルカには疑問に思えたのだ。

「スバル、お前俺に隠れて何かしているのか？」

「へ？」

疑問に思ったフォルカは思い切ってスバルに尋ねた。

するとスバルの顔が思いつき驚きの顔になるも、すぐさま平静を装った。

「た、大した事はしてません。只義兄さんから教わった事の反復練習をしているだけです」

「そうか・・・（妙だな、それにしては腕の上がり方が異常に早い。まるで他の誰か、例えるなら相当実戦を経験した者に教わっているとは思えないが・・・）」

フォルカが内心呟きながらスバルを見ていた。

その目の前でスバルと言えば、息をすっかり整えて立ち上がり土埃

を手で払い落としている所であつた。

まあ、考えても仕方のない事だな。

内心そう呟きながらフォルカはスバルの事について考えるのを止めた。

話したい事であればいずれスバル自身が話してくれるだろう。

そう思っていたのだ。

「よし、今日の修練はこれまでだ。汗を流して飯を食って、明日の修練に備えて寝るとしよう」

「はい！」

フォルカのそれに元氣良くスバルは応える。
それにフォルカは笑みを浮かべた。

時刻は夜、日々の修練の疲れがぐっすり眠っているスバルをそのままにしフォルカは夜道を歩いていった。

日中はスバルとの修練で殆ど潰れる。その為彼の自由の時間と言えばこの時間だけなのだ。

と言つてもその時間にする事といえば美しく輝く月を眺める位しかないのだが。

と、その時であつた。背後からフォルカに向かって歩み寄る音が聞

こえた。

足音からして自分よりかなり年が上の男性と認識出来た。
振り返ると、其処に居たのは修羅將軍の一人『激震のミザル』であった。

「これはこれは、フォル力殿ではないか？」

「ミザル將軍！このような時刻に一体どうしたのですか？」

「なに、貴様に話があつてな」

ミザルがフォル力を指差してそう言う。

それにフォル力は首を傾げる。

一体何の話なのだろうか。

疑問に思ふもフォル力にそれを問いつめる気などなくそのままミザルの方に向き直った。

「それで、話とは何でしょうか？」

「話の内容は貴様が弟子として養つておる、確かスバルとか言う娘の事じゃ」

ミザルの言葉を聴いた途端フォル力の眉が動いた。

ミザルがスバルの名を出すと言う事はフォル力にとっては余り嬉しくない事だからだ。

ミザルの噂は耳にしている。過度に及ぶ人体実験などで多くの修羅が犠牲となった。しかし修羅將軍と言う地位に居る為大きく出られないのだ。

そもそもこの世界は力こそが全て、力ある者が力の無い者をどうしようと思はれる者は存在しないのだ。

しかしそれも度が過ぎれば修羅王じきじきの肅清に会う。ミザルはそのギリギリの線を見極めて活動を行っているのだ。

だからこそ他の修羅達からは余り良い印象を与えていないのである。

「簡潔に言おう。お主の弟子であるスバルを是非私に譲って欲しいのだよ」

「なんd・・・なんですって!？」

一瞬ため口になりそうなのを必死に飲み込んで丁寧語で返した。

今のフォルカは一介の修羅に過ぎない。それが修羅將軍に食って掛かるものなら直ちに肅清されるのがオチだ。

そうなれば間違いなくミザルはスバルを連れ去り、人体実験のモルモットにする筈である。

もしそうならなかったとしても自分が居なくなればスバルの面倒を見る者は誰も居ない。

本来スバルはこの世界に来てはいけない存在なのだ。故に他の修羅達はスバルを殺すと躍起になっている。

だからこそフォルカは今此处で死ぬ訳にはいかないのである。

「考えても見たまえ、彼女は貴様が助けたとは言え只の異端児ではないか？わざわざ貴様が育てる必要などあるまい。それよりも他にも優秀な修羅は山ほど居る。あんな捨て子などよりももっと優れた修羅を紹介してやろうではないか。どうだ？」

「お断りします!」

「何？」

ミザルは眉をしかめる。それはフォルカの言葉のせいでもある。

そのフォルカは毅然とした目つきでミザルを睨んでいた。

まっすぐに信念を胸に抱き何者にも屈しない強い意志を持った目でミザルを睨んでいたのだ。

「それは一体何故じゃ？」

「彼女は、スバルは私が育てると誓った大切な弟子・・・嫌、義妹

です。義妹の命を守るのは義兄としては当然の事なのです」

「貴様、貴様はあるんな小娘一人の命の為に己の人生を棒に振るというのか？あの娘を私に譲れば將軍の椅子も用意してやるぞ？どうだ、悪い話ではあるまい？」

「何と言われようとお断りします。私はスバルを手放す気などありません」

丁寧にだが、毅然とした態度でフォルカはミザルの申し出をきっぱりと断った。

それを見たミザルは不満げな顔をしたまま引き下がる。

「ふん、そうか、折角良い話を持ってきてやったと言っのに・・・せいぜい下級修羅として前線で戦いくたばるが良いわ」

吐き捨てる様に言い放ち、そのままミザルは夜の闇の中へと消えていった。

後には自分ひとりしか残っていない。フォルカはそのまま月を見上げた。

今宵は満月であつた。まん丸とした月が美しくこちらを照らしている。

「スバル、例えば周りに味方が居なくても、俺は最後までお前の味方だ」

誰も居ない夜空の中、月に向かいフォルカは呟いた。

翌朝、フォルカは何時もより早く練習場に出てきた。

また例の流れ修羅達がスバルを狙うかも知れないと思ったからだ。だが、練習場に近づくにつれて聞こえてきたのは打ち込みの音ともう一つ。それはスバルと聞き慣れない少年の掛け声であった。

疑問に思ったフォルカはこっそり見つからないように練習場を覗いた。

其処にはスバルとトウマが互いに激しく技をぶつけあっていたのだ。その動きは間違いなく実戦慣れした動きであった。

多少動きに癖がある物の相当鍛え上げられた動きで闘っている。

一方のスバルもトウマには遠く及ばない物の必死に食らいついてきているのが分かる。

なるほど、そう言う事だったのか。

フォルカは納得した。どうして日々スバルの腕前が上昇していくのか。

その原因はあのトウマであった。トウマはこうしてフォルカが現れる前までスバルと組み手を行いお互いを高めあっていたのだ。

「お、そろそろお前さんのお師匠様の来る時間だな」

「そうですか、もうそんな時間でしたか」

ちらりと二人は練習場の真ん中にある時計台を見た。時刻は朝の5時に指しかかっていた。

互いに衣服と息を整えて柔軟を行う。

「んじゃスバル。また明日もこの時間にやろうな」

「はい、また明日もお願ひします」

「その必要はないぞ」

「「ゑ!!!!」」

突如声がしたのに驚く二人。

バツチリ揃ったタイミングで肩を震わせて恐る恐る振り返る。

其処には何時の間に居たのかフォルカが腕を組んで立っていた。

「に、義兄さん」

「あ、あの・・・その、これは・・・」

二人揃って真つ青になり必死にフォルカに弁解の言葉をしようと模索していた。

普通他人の修羅同士の接触はご法度なのである。

もし弟子同士が組み手をしているのを師匠に見つけた場合、その弟子は師匠に殺されてしまうのだ。

それは自身の流派を他人に流さない為である。

もし他人に自身の流派が流されてしまえばその修羅は更に強くなってしまう恐れがある。

そうなれば自分の修羅の生き残れる確立がぐんと減ってしまうのだ。故に厳しいながらも今までそうして来たのが事実である。

その為に二人は青ざめていたのだ。

「怯える事はない。俺は別にお前達に肅清する為に来た訳ではないんだ」

「へ？」

フォルカの言葉にトウマは素っ頓狂な声を上げる。

「トウマと言ったな。お前の腕前は中々だ、だが少々荒削りな面が見えるな」

「たはは・・・これ言っちゃうと我流だもんで」

フォルカの言い分にトウマは頬を染めて頭を掻く。

図星を指されてムズ痒い印象を得たのだろう。

横目で見ているスバルも何故か笑みを浮かべていた。

「どうだろうかトウマ。スバルと共に機神拳を学ばないか？」

「お、俺が・・・機神拳をですか!？」

それは他の修羅達にとっては喉から手が出るほど言っただけの言葉である。

機神拳と言えば修羅世界でもかなり上位に位置する強さを誇る流派である。

しかしそれ故に弟子になる条件も厳しく中々なれないので有名なのだ。

その機神拳をまさか自分が学べるのかと思うと自然と嬉しさがこみ上げてきていた。

「ぜ、是非学ばせて下さい!」

輝いた瞳でトウマはフォルカに頭を下げる。

それにフォルカは笑みを浮かべて頷いた。

隣に居たスバルも喜んだ顔をしている。

これからはフォルカとトウマの三人で修練が行える。
そう喜んでいたのだ。

そう、この時は確かにそうであつたが・・・

見え隠れする陰謀と新しい弟子（後書き）

銀時

「外伝の更新も久々だなあ」

新八

「この時のトウマって凄い素直な子なんですなえ」

神楽

「それが本編じゃあんな狂気と殺意に満ちた危ないキャラになるアルよ」

一体何故そうなったのか？それはこれから少しずつ語って行こうと思います

銀時

「ま、でもあんまりダークに書くと読者が減るからほどほどにしておけよ」

気をつけます。でも書いてて楽しいから自重は難しいかな？

新八

「とんでもないドS作者だよこの人……」

初めてのときめき、初めての任務、初めての殺し（前書き）

今回ちょっとムフフなのとちょっぴりダークなのが合わさっています

初めてのときめき、初めての任務、初めての殺し

トウマが加わりスバルの修練は更に充実した物となった。
朝早くからフォルカとトウマとの三人組みの修練を行い、その後はトウマとの自主練を行っていたのである。

そのトウマとの自主練のお陰でスバルの腕前は更に上がる事になっていた。

そして、それはトウマも同じであった。
我流の闘い方をしていたトウマが更に機神拳を習得していく事により更に強くなっているのである。

「ふいー、今日もしんどかったなあ」

修練を終えたトウマが首を数回回しながら愚痴っていた。
それを見てスバルが微妙な顔をしていた。

「何を言っていますか？この日々の修練こそ明日へと繋がる。そう
フォルカ義兄さんも言っていたではありませんか？」

「へいへい、相変わらずお前はマジメだねえ。偉い偉い」

そう言つてスバルの頭をナデナデする。

スバルには非常にくすぐったい感じがしたのかその手を払いのける。

「子供扱いしないで下さい！」

「なあに言つてんだよ。まだお互いがキじゃねえか。ま、お前の場合
ちよいとばかり胸の発育は良いみたいだけだなあ」

トウマがニヤリと笑いながらスバルの胸元を見る。
それを聞いたスバルが首を傾げていた。

「そんなに胸が恋しいんですか？」

「お前はもう少し女らしさを学べ」

「????……つまりどう言う事ですか？」

さっぱり言っている事が分からないのかスバルの頭には大量の「？」が浮かぶ。

それを見たトウマが激しく溜息をつく。

「やれやれ、お前みたいな単純馬鹿を持ってフォルカさんも苦労してるなあ」

「義兄さんを愚弄すると……殴りますよ！」

そう言ったスバルは両の拳に力を込めて殴り掛かる。

しかしその攻撃もトウマには空しく空を切るのみであった。何度も何度も殴ってはいるのだが結局トウマは笑いながら次々とわしていくのみであった。

「どうしたどうしたあ？悔しかったら当てて見るよお」
『ムカアツ！』

スバルの額に青筋が浮かび上がり更に激しい突きを放つ。

余りの速さに拳が何本も見えるかの錯覚がしていた。

だが、それもトウマは簡単にかわしてしまう。

「ほう、随分と元気な様だなあ」

「あ、フォルカさん」

「フォルカ義兄さん！」

二人の間に入るように不気味な笑みを浮かべるフォルカが居た。

「そんなに元気があるなら追加メニューでも始めるとしようか」
「げげえ！」

「はい！」

フォルカの提案にトウマはゲンナリとなりスバルの目が輝いた。

時刻は日が沈み既に夜に入っていた。

その中、トウマは一人軋む体をどうにかして動かしながらある場所へ向かっていた。

「いててえ・・・ったく、ガキのお守りも楽じゃねえぜ。ま、機神拳が習えるのは嬉しいがな」

等と愚痴りながらトウマは風呂場に向かった。

修練の汗を流す為である。

服を脱ぎ手拭いを肩に掛けて鼻歌混じりに風呂場に入る。

「あ」

「あ」

声が重なった。

其処に居たのは目を疑う光景であつた。

トウマの目に飛び込んできたのは、今風呂場を利用中のスバルであつた。

風呂場を利用していると言う事は即ち彼女は今裸と言う事になる。

「おい、此処男湯だぞ？」

「別に構いません。先ほどまでフォルカ義兄さんも居ましたので」

「ああ、なるほどね」

スバルの言葉にトウマは納得した。

修羅の世界では師匠と弟子は基本寝食を共にするのが決まりなのだ。そしてそれは風呂も同じ事である。

弟子にとって師匠は親とも同じ存在なのである。

更に言えばスバルには羞恥心と呼ばれる物が欠如しているらしくおっぴらに男の前で裸を見られても何にも感じないらしい。

それはそれで不味いのではないのか？

不安になるトウマである。

「ま、まあ・・・お前がそれで良いなら良いけどよお」

ぎこちない言葉遣いでトウマが体を洗う。

そうしながら横目でチラリとスバルを見た。

スバルも同じように手拭いで汗や垢を落としていく。

降り注ぐシャワーの湯の一粒一粒が明かりに照らされ細かい宝石の雨にも見えた。

そしてその中に映るスバルが今まで以上に煌びやかに見えた。

一瞬トウマはドキツとなつた。

自分は何を思っていたのだろうか。

相手はまだ自分より一つ下の子供である。

そんな子供に自分は何をときめいているのだろうか？

そう感じ取りトウマは自身の胸に手を当てる。
手から感じられるのは早鳴りに鳴り響く鼓動である。
そして、顔は見えないが自分の頬が赤くなっているのに気づく。

「どうしました？」

「どわぁ！」

ふと、スバルが真横に来ていたのに気づかなかったトウマが思いきり変な声で叫び転げまわった。

その光景を見ていたスバルがまた深く首を傾げる。

「どうしたんですか？今のトウマは少し変ですよ？」

「な、ななな何でもねえよ！さささ、さあてと、明日も早いだろうし今日はもう寝るかなあ」

ぎこちない言葉でそう言いながらトウマは風呂場を後にした。

そして倍速の勢いで体の水気を拭き取り服を身に纏い急ぎ自分のねぐらへと戻っていく。

「い・・・一体、どうしちゃったんだ？俺は」

トウマは自身の心境に戸惑いを感じた。

この世に正を受けて早12年。

異性への興味もまあ出始める頃である。

しかし、トウマには運がないのか全く異性との交流がなかったのだ。そして、今トウマは先ほどのスバルを見てしまい確信を持ってしまったのである。

「俺・・・スバルに恋・・・しちゃったのか？」

一人そう呟くトウマであった。
まだ、彼が12歳の頃の話である。

翌朝、何時もの様に修練を行う事となったスバルとトウマ。
だが、トウマの様子が少し変であった。
何時もの様にスバルをからかわないのである。

「どうしたんですか？トウマ」
「へ？な、何だよ」

スバルがトウマの顔を覗き込むように尋ねる。
その顔を見た途端トウマが飛び上がるように下がる。
それにはフォルカも疑問に感じた。

「どうしたトウマ？具合でも悪いのか？」
「い、いえいえ全然元気ツスよ！」

気遣うフォルカの前でトウマが元気の良さをアピールする為にその
場で飛び跳ねたり逆立ちしたりしてみせた。
そんなトウマを見てスバルとフォルカは互いに首をかしげたがまあ
良いか、と思い特に気にしないでいた。
それから、また何時もの様に修練は行われたのである。

訓練場の中では三人の掛け声と手足のぶつかりあう音が響き渡る。今行っているのはスバルとトウマのコンビVSフォルカと言う20n1の要領である。

2対1と言うハンデがありながら二人はフォルカに致命傷を負わせられないで居た。

どれほど強力に打ち込んでも、どれほど巧みにフェイントを織り交ぜながら打ち込んでもフォルカは涼しい顔でかわしてしまうのだ。そしてカウンターで一発入れられただけで二人はダウンしてしまった。

今回もまたフォルカの勝ちに終わった。

「あ、相変わらず強え・・・」

「当たり前じゃないですか！私達の師匠なんですよ！」

床に大の字になって倒れる二人がそう言いあう。

「さて、そろそろ起きろお前等」

倒れていた二人に対してフォルカがそう言い放つ。それを聞いた二人がよろよろと立ち上がる。

「今回はこれから修羅王様の元へ行く」

「そりやまた・・・何で？」

「お前達に最初の任務をお与え下さる事だ」

「そ、それは本当ですか？」

思わずスバルの声が上ずった。

修羅にとってそれは有難い事である。

任務は実力のある者から優先に任される物である。

それも修羅王直々の任務など超級修羅でも滅多に御目に掛かれない

代物である。

それが今二人の前に飛び込んできたのだ。
スバルは勿論トウマの目も同じように輝きだした。

「お、おいおい・・・こりやもしかすると、俺達一気に將軍にまでなれるんじゃないの？」

「調子に乗るなよトウマ。俺たちからしてみればお前達などまだヒヨッコ同然なんだ」
「へーい」

息巻くトウマをフォルカが嗜める。

それにトウマが多少不貞腐れながらも了解した。

「服装はそのままで良い。とにかくついて来い」

「はい！」

「へえい」

フォルカの言葉にスバルは元気良く返事し、トウマは半ばぶっきらぼうに返事をする。

修羅王の待つ謁見の間までは訓練場から約30分程敷地内を歩いた先にある巨大な城の中にある。

西洋と和風のコラボレーションといった感じの巨大な建造物こそが修羅王の住む城なのである。

だが、その壁のところどころには風穴にも似た穴や巨大な亀裂などがあつた。

それら全ては修羅王に挑んできた修羅達の名残である。

修羅王に修羅が挑む事は今期に始まった訳ではない。
過去にもある。

それも、初代修羅王の代から続いているのだ。

この世界では代々力ある者が正義である。

その為修羅王の座を奪おうと幾多の修羅が修羅王に挑んできたのだ。ある者は正々堂々正面から挑み、またある者は闇夜に紛れて闇討ちしようとしていたりしていた。

そして、現在修羅王の座についている男「アルカイド・ナアシュ」もまたその一人であった。

彼は先代修羅王に正面から挑みこれを倒し、修羅王の座についたのである。

そんな彼に挑む修羅もまた数多く居る。

だが、その尽くは返り討ちに会う。

この城の傷跡はそんな幾多の戦いの名残なのである。

そして、三人は今その名残の残る修羅王の城の謁見の間にて修羅王と対面していた。

三人が肩膝をつき頭を下げる。

その前には玉座に座る漆黒の鎧を身に纏った厳格な顔つきの男が居た。

彼こそこの世界を統べる修羅王である。

そしてその隣には彼の腹心である別名激震のミザルが居る。

そして反対側にはフォルカの兄弟子であるアルティスが立っていた。

「フォルカ・アルバーク以下二名、只今参上致しました」

「ふん、良く来たなフォルカよ」

修羅王に代わりミザルがフォルカに言い放った。

明らかに不機嫌そうな顔つきである。

「修羅王様、我等にお与え下さる任務の詳細。お聞かせ下さい」

「フォルカよ。うぬの後ろに控えている若き修羅。腕は立つのか？」

「いえ、まだ半人前で御座います」

修羅王の問いにフォルカは実直に答えた。

此処で見得を張っても無駄な事なのだ。

修羅は絶えず覇気を体に纏っている。

それが修羅には見えるのだ。

なので嘘についてもその覇気の形、大きさ、色などを見ただけでその修羅がどれ程の実力なのかすぐに分かるのである。

修羅王もまた後ろに居るスバルとトウマの覇気を見ていた。

そして顎を指で軽く弄る。

何か考え事をしていたようにも見えた。

「まあ良い。今回の任務にはその二人を中心に行って貰う」

「な！」

修羅王のその言葉に一番に驚いたのはフォルカであった。

驚愕の余り目が大きくなる。

「しゅ、修羅王様！そのご決定はお待ち下さい！彼等はまだ素人なのです！それに今回が初めての任務なのです！」

「なればこそだ。若き修羅に試練を与えればこそ修羅の成長に繋がるのだ」

「そ・・・それは・・・そうですが」

フォルカの顔が洪る。

修羅王の決定は絶対なのだ。

だが、幾ら若き修羅の成長には欠かせない物である。

しかし、それではスバルを守るという約束が果たせなくなってしま
うのである。

それがフォルカの悩みである。

「やはり、二人にはまだ早い気がします。今回の任務は・・・」
「フォルカ義兄さん！」

「フォルカさん！」

フォルカが進言しようとした時、その後ろに控えていた二人が声を上げる。

「その任務、是非私達にやらせてください！」

「初任務上等ツスよ！フォルカさん抜きでも俺らだけでやってのけますって！」

「お前達・・・だが・・・」

「其処までだ！」

良い渋るフォルカを修羅王が一括する。

その雷鳴の如き怒号の前にフォルカはすぐさま振り返り頭を下げる。

「その者達は既に十分な決意を胸にしている。お前がとやかく言う筋合いはないであろう」

「しかし・・・」

「フォルカよ。これもお前の修行なのだ」

「アルティス兄さん」

フォルカの前にアルティスが立つ。

そしてフォルカの肩に手を置きそう告げたのだ。

「俺の・・・修行・・・ですか？」

「お前はこいつらの師匠なのだ。師匠たるもの弟子の成長を見守るのも師匠の務めだ。此処でお前がこいつらを甘やかせたらこいつらは一生成長できないのだぞ。お前は今、師匠なのだ」

「・・・分かりました。ですが、俺も同行願います」

「よかるう、但し！貴様が任務に介入する事は許さん！その場合は貴様等三人を裏切り者とし、この我自らが肅清する」

修羅王の言葉はとても重かった。

粛清、それは即ち修羅王の手でトドメを刺される事である。

それほどまでに修羅王が今回の任務に彼等を期待していると言う事になるのだ。

「任務は簡単だ。この国を無断で出ようとした裏切り者を粛清して貰いたい」

「裏切り者？」

「修羅は生まれ育った国より外へ出る為には修羅王の許しがなければならぬ。その修羅は我の許しもなく勝手に勝手に我が国を抜け出した。これは重罪に値する」

修羅王の目が更に険しくなる。

修羅世界は終始戦いの起こる世界である。

それ故にその国の流派は他国に漏洩してはならない物なのである。

故に外の国に赴く際には修羅王の許可が必要なのだ。

だが、その修羅はその掟に逆らい国を抜け出してしまったのである。それが修羅王の怒りに触れてしまい今回の任務へとなったのである。

「今回の任務はその裏切り者を討伐する事にある。だが、油断はするな。そいつはそれなりに腕の立つ修羅だ。だが、貴様等二人で赴けば問題はないであろう。吉報を待っている」

「はっ！」

修羅王に向かって二人は腕を前に突き出して一礼した。
フォルカも同じくその動作を行っていた。

「では、我等はこれにて失礼します」

フォルカが立ち上がるとそれと同じくスバルとトウマも立ち上がり
謁見の間を後にした。

後には修羅王とミザル、そしてアルティスだけが残っていた。

「しかし、修羅王様も酔狂な事をしますなあ。何故あの様な小童ど
もに任務をお与えに？」

「彼奴等はいずれ我をも越える程の逸材になる・・・そう我は思っ
た。それだけの事だ」

ミザルの問いに修羅王は答える。

その時の修羅王の口元は僅かに上ずっていたのであった。

場所は変わり此処は国外の所に聳え立っていた空き家。
それを見下ろすように崖の上にスバルとトウマは居た。
月の光が辺りを薄明るく照らしている。

視界はそれほど悪いとはいえない。

しかし決して良いとも言えない一長一短な状態である。

「さて、俺達の初任務か・・・腕が鳴るぜ」

「ええ、裏切り者を許す訳にはいきません！この手で制裁を加えま
す」

「ま、そう言うこった。裏切り者には悪いが俺達の良い鴨にでもな

って貰うとすつか」

トウマがニヤリと笑う。

その隣でスバルが「鴨とは何ですか？」と問いながら首を傾げている。

どうやら彼女にはその意味が分かっていなかったようである。

「あゝ、説明が面倒だからその内な・・・それよりも、そろそろいくぞ」

「分かりました！」

二人は軽く頷くと跳躍し崖の上から静かに空き家の前に降り立った。そしてすぐさま入り口の横に張り付きお互いに無言のまま合図を送る。

扉を開けたと同時に中に進入し裏切り者を始末しようと言う魂胆だったのだ。

しばし間を置き、相手に気づかれていないかを悟りながら慎重に扉の取っ手に手をかける。

「ふう・・・」

深く息を吐く。

心臓の鼓動が早なっているのが分かった。

思わず額から冷や汗が流れる。

視線を移すと、目の前に居たトウマの顔にも緊張の色がうかがえた。先ほどは軽口を叩いていたと言うのに切り替えの早い事である。

（・・・よし！）

意を決したスバルは取っ手を思い切り引き扉を開いた。

そして二人が中になだれ込む。

だが、其処にあったのはもぬけの空となっていた部屋の中であった。

「な！」

「い、居ない！？」

二人は疑問に思い辺りを見回した。

だが、回りには人の気配が全くしない。

「人の気配が・・・しない」

「んだよ・・・もぬけの空じゃねえか？ガセネタだったのか？」

二人がそう言いながらほんの一瞬気を抜いた。

その瞬間であった。

突如天井から何かが降って来た。

それはスバルとトウマの間に降って来たのだ。

余りに突然の事だった為に二人は驚き体制を崩してしまう。

其処をその者は見逃さなかった。

「ぬうん！」

「ぐっ！」

「があっ！」

その者は二人に対し拝承を当てる。

鳩尾にそれを食らった二人はそのまま狭い家の壁に叩きつけられた。
激しい衝撃が背中から全体に伝わる。

息が出来ず二人とも数回咽った。

その後自分達を突き飛ばした不屈き者を見た。

その者は男性であった。

フォルカより数年上と思われる背丈で黒い髪をしており細身の男で

あつたのだ。

その男がスバルとトウマの間に立っていた。

「ふん、また刺客か。しかも今度はガキ？俺も相当舐められたものだな」

「へ、今のはちょいと油断しただけだったの！てめえなんざ俺達の手で叩きのめしてやるよお！」

「ほう、意気が良いじゃねえか。こりゃかなり楽しめるな」

男は笑みを浮かべながら構える。

「ま、待って下さい」

「うん？」

それを止めるようにスバルが男に声を掛けた。

まだ相当ダメージが残っていたのか足取りがおぼつかない。

それでも必死になってその男の前に立つ。

「お、教えてください。どうして・・・どうして裏切りなんて事をしたんですか？」

「そんな事をお前達に話す必要はない。お前等は俺を倒す事を命じられてきたんだろ？だったらその任務をこなす事が修羅だろう。下らない感情は捨てろ！」

男はそう言い放つとスバルに対し猛然と殴りかかってきた。咄嗟にそれを片手で払う。

だが、その直後に男の膝蹴りがスバルの胸部に襲いかかる。凄まじい衝撃と痛みが伝わり体がくの字に曲がる。

「が・・・はあ！」

「どうした？威勢が良いのは口だけか？」

「野郎！」

動けないスバルに代わりトウマが後ろから殴りかかった。

だが、そんなトウマに向かい男は無意識の内に後ろに向かい蹴りを放った。

それは諸にトウマの腹部に命中しトウマは今度は天井に叩きつけられた。

「づ・・・づええ・・・何だこいつ？」

「ふん、半人前風情が俺を倒せる筈がないだろうが！」

動けない二人に男がそう言い放つ。

それに対しスバルとトウマは苦虫を噛み潰した顔をしながら立ち上がる。

そして再び構えをとる。

「確かに俺等はまだ半人前だよ！だがなあ・・・だからって此処で尻尾巻いて逃げる訳にやいかねえんだよ！」

「トウマの言う通りです！此処で私達は引き下がる訳にはいかないんです！」

今度は二人同時に殴りかかった。

嫌、それは連撃であつた。

目にも留まらない速さで次々と拳や蹴りが放たれる。

それを男は片手と片足でそれぞれ対応する。

だが、徐々に男の顔色が曇りだす。

「スバル！」

「応！」

お互いに声を出し合いトドメの一撃にと男のわき腹に向かい強烈な肘鉄と膝蹴りを放つ。

それらが互いにぶつかりあい男の脇に襲い掛かってきた。

嫌な音が響いた。

何かが砕けた音である。

恐らく男のあばらが砕けた音であろう。

男が吐血し、たたらを踏む。

両手で脇を押さえながらも二人を睨む。

「へ、どうでえ！これがてめえが半人前だつて言つた俺達の実力だぜ」

「ちつ、油断した・・・お陰であばらが殆ど砕けちまつたしな」

口元から血を流しながらも男は不適に笑う。

すると男は其処で構えた。

その構えは二人にとって余りにも御馴染み過ぎる構えであつた。

「そ、その構えは・・・」

「機神拳！」

「そう、俺もかつては機神拳を学んでいたのさ！さあ・・・此処からが本番だ！」

そう言うともまず男はトウマに襲い掛かってきた。

かと思うと猛烈な勢いで横薙ぎの蹴りが襲い掛かってきた。

それに対応する事が出来ずにトウマは蹴り飛ばされて壁に叩きつけられる。

だが、それだけでは終わらずその壁を突き破つて外に放り出されてしまった。

「と、トウマ！」

「これが『空円脚』だ！そして！！」

今度はスバルに襲い掛かる。

両手に覇気を纏いそれを一気に放ってきたのだ。

放たれた覇気は2匹の蛇となりスバルに襲い掛かる。

鋭い牙が肉に食い込み猛烈な熱さが全身に襲い掛かる。

「くああああ
！」

悲痛の声を上げる。

最後に覇気で作られた蛇は尻尾でスバルを壁に叩きつけて後に霧の如く消え去った。

「これが『機神双獣撃』だ！己の中の覇気を敵にぶつける事がこの技の極意だ！」

「ぐ……うう……」

右肩を抑えながらスバルが男を見る。

全身からは蛇の牙の跡があちこちに出来ており、其処からつつすらと血が流れていた。

更には全身に重度の火傷を負っていた。

最早今のスバルに立ち上げられる余力は無かった。

「これもこの世界の成り行き。例え小童と言えども俺の命を狙いに来たのなら容赦はしない！覚悟！！！」

男が右腕に更に巨大な覇気を纏いそのままスバルに向かい殴りかかってきた。

スバルは自分の目の前が真っ白になっていくのを感じた。

自分はこれで終わってしまうのだろう。
此処でこの男に殺されてしまうのだろう。
そう内心覚悟を決めていた。

気がつくともスバルは自身の手の異様な感触と金臭い匂いに気づいた。
見れば、自分の目の前には寄りかかるように倒れていた男が居た。
そして、その男の胸部にはスバルの腕が深く突き刺さっておりその
まま背中まで突き抜けていたのだ。
突き抜けていたスバルの手にはベツトリとその男の血がこびりつ
ている。

その血がこの金臭さの原因でもあった。

「ふっ……どうやら……俺は……此処で……死ぬ……
のか……」
「はっ！」

スバルはハッとした。

既に事切れているかと思ったその男はまだ生きていたのだ。
必死に手を抜こうとしたが体が思うように動けずどうする事も出来
なかった。

だが、そんな風に暴れるスバルを見て男は笑みを浮かべた。

「安心しろ……もう俺は死ぬ……別にお前を道連れに……な
んてなあ……しねえよ……」

「どうして……どうしてなんですか？どうして私達を裏切ったん
ですか？」

「母・・・隣の国には俺の母が・・・居るんだ・・・その母が病に伏せていたんだ・・・俺は、せめて死に目に会いたい一心で・・・国を飛び出した・・・だけど、結局はこのざまだ・・・情けねえ・・・よ・・・」

そう言い終えると男は事切れた。

その時の感触がスバルの手を通じて全身に伝わってきた。

「スバル！」

それから間もなくしてトウマが家の中に入ってきた。

そのトウマの目に映ったのは事切れた男とその男の胸板を貫いたスバルの姿であった。

だが、目の前のスバルの傷は相当酷い状態であった。

トウマは事切れた男を退かし、スバルを抱き上げる。

「おい、スバル！スバル！」

必死にトウマが呼びかける。

だが、スバルの顔は傷とは裏腹に真っ青な顔をしていた。

「どうした？傷が痛むのか？」

「と・・・トウマ・・・私・・・ひ、人を・・・」

「！！！！・・・お前、まさか・・・今まで人を殺した事が無かったのか？」

トウマの問いにスバルは微かに頷いた。

ならばその震えの理由も明らかである。

スバルは今人を殺した際の恐怖で震えていたのだ。

如何に修羅の修練を積んだとは言えまだ１１歳の子供である。

その子供が人を殺める事は相当な衝撃となつて襲い掛かってきたのだ。

「とにかく、今は落ち着け。もう任務は終わったんだ。お前は少し寝ろ。俺が運んでやる」

トウマがスバルを抱きかかえたまま空き家を後にする。

こうして、スバルとトウマの初めての任務は終わりを告げたのであった。

初めてのときめき、初めての任務、初めての殺し（後書き）

次回は一気に時が飛びます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4994u/>

龍魂 黒炎の龍と獄炎の獅子

2012年1月13日14時46分発行